
博士と助手。

保科 郁

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

博士と助手。

【Nコード】

N0681D

【作者名】

保科 郁

【あらすじ】

とある研究所にいる、博士と助手のお話。コメディ風。(特に意味もオチもなくノリだけで進んでる感じです)、(スイマセン)

博士と助手。

透明薬―1

「やった！ ついに出来たぞ！」

そこはかたなく怪しげな雰囲気が漂う部屋の中、我が師である博士が勢い良く立ち上がった。高々とビーカーを掲げて。

「……………何ですか、それ？」

「おお！ よくぞ聞いてくれた」

博士は握り締めているビーカーを振りかざし、嬉々としてこちらを振り向いた。

ビーカーの中には紫と灰色が交じったような奇妙な色の、何故だかぼこぼこと泡立っている液体が入っている。

どうでもいいが、その物体Xを目の前にかざすのは止めて欲しい。とてつもなく危険な香りが漂ってくるじゃないか。

「これはまあ、いわゆる透明人間になれる薬だ！ 苦節二時間……………
ようやく完成したのだ！！」

やけに静かだと思つたら そんな事してたんですか、あんた。真面目に仕事してくださいよ。

呆れ返った私の視線も気にならないのか、博士は薬の効能を熱くそれはもう、うざい位 熱く語ってくれている。

……聞き流しとごう。

私はこれ以上無い良策を導きだした。ついでに物体Xからさり気なく身を離し、安全を確保しておく。

「……と言っわけで、試してみてくださいないかね！」

せつかく身を離れたというのに、博士が勢い込んで ずずいと身を乗り出してきたおかげで、私はまた窮地に立たされた。

や、止める！ 私はまだ死にたくないぞ！！

目の前で今にも零れそうなくらい波打っている物体Xを見て、心の中で悲鳴をあげる。身を仰け反らせながら、自分の口元が引きつるのを感じた。

「いえ私は、透明になりたいと思った事は」
「もちろん、あるよね！！」

断ろうとした私の言葉を遮り、博士は目を輝かせながら宣^{のたま}った。

「透明になったら、女の子の秘密とか覗き放題だからね！ 銀行強盗^{おて}だって御手の物だぞ！！」

人に犯罪を勧めんな！ って言うか あんた、そんな事を考えて透明薬 という名の物体X を作ったんですか！？

「さあ、遠慮なく飲んでくれたまえ」
「嫌です」

博士と助手。

もちろん断る。当たり前だ。誰が飲むんですか、そんな怪しげな物体を！

「え〜何でさあ？ 君と私との仲じゃないか、飲んでくれよお」

「……博士と助手以上の関係になった覚えはありません」

むしろ、それすら抹消して赤の他人になりたい。今、この瞬間にも。切実に。

「も〜冷たいなあ。……よし、分かった！ 今ならこの毛生え薬もつけよう！！」

「いいりません！」

どこからか また怪しげな物体を取り出した博士に、私は間髪入れずに返した。どこぞの悪徳訪問販売ですか、あんた。

私の拒絶に、博士は不満の声を呟きながらいじけだしてしまった。

無視だ、無視！ ここで付け上がらせたら碌ろくな事にならない。

というか、いい年したおっさんが床にしゃがみ込んで“の”の字を書いている姿はとてつもなく不気味だ。果てしなく気持ち悪い。

「……ひどいよ、卯月君うづき」

少し涙目になりながら顔をあげる博士。どうやら声に出してしまったようだ……まあいいか、どうせ博士だし。

「私は本当のことを言っただけですが、何か？」

それとも何ですか。自分は可愛いとか思ってたんですか？ あんた、むさ苦しいの一言に尽きますよ。

「うっ……っ」

やっと己を自覚したのか、博士はそれ以上 何も言ってこなかった。

静かになった所で、私は謎の物体X、Yを見た。今だにぼこぼこ泡立っているXと、何やらゆっくり対流しながら黄色の煙を立ち上らせているY。

……果てしなくやばすぎるだろ、これ。

「とりあえず捨てときますね」

「……っ!?! 何を言っただ卯月君!!」

至極^{しごく}まともな反応をした私に、血相を変えて縊^{すが}り付いてくる博士。きもい、触るなおっさん。

「い、いや。私がおっさんなのも気持ち悪いのも認めるから、それは棄てんでくれ!!」

涙声で卑屈な態度をとってくる博士に、さすがの私も憐れな感情を覚えた。

まあ、一寸の虫にも五分の魂というし……? ?

私は棄てるのを一旦諦め、物体X、Yを作業台に静かに戻した。手荒に扱って、零れでもしたら大変な事になる気がする。

その作業台の横では博士が静かに涙を流していた。何ですか、鬱^{うつ}陶^{とう}しい。

博士と助手。

「……卯月君。さっきから心の声がだだ漏れなのだが……わざとな

のかね」

「いえ、わざとだなんてとんでもない。無意識という名の悪意です」

その私の言い分に、更に涙を溢れあふさせる博士。

「うつつ……。何でそんなに冷たいんだ。私は君に何かしたのか？」

「ええ。何かしたかと言われれば 散々されていますね。取り敢えず 初日ここに来た時、試験と称して色々と変な物を飲まされましてたけど、あの時の事は一生忘れませんよ。一週間は寝込みましたし」

あの時は本当に死ぬかと思った。実際 生死の境を彷徨っていたらしいし、お花畑も見たような気がする。

「いや、あれは臨死体験をするという……」

「言い訳はいりません。とにかく博士、臨死体験と言わず百回くらい死んどいてください」

その力一杯 私の心を込めた言葉に、博士は ぼろ泣きを始めた。ああ、鬱陶うつとくしい。

「それで、この薬はどうするんですか」

私は絶対に、何があっても飲みませんけど。というか一秒でも早く、この世から消滅させてしまいたい……。製作者ごと。

「う、卯月君!？」

私の黒い感情に気付いたのか、博士が目に見えて焦りだした。

博士と助手。

「嫌ですね博士、何を焦っているんですか。私が何かするわけないじゃないですか」

「そ……そうだ、よね」

「本気でする時は、気付かれないようにしますよ。警戒されては元も子ありませんから」

「卯月君！！！？」

ほんの少しの本音が混じった言葉に、博士は「ずぞぞっ、と壁ぎわまで身を引いた。その本音が九割八分くらいあるのはここだけの話である。」

透明薬―2

「まあ冗談はさて置き。本当にどうするんですか、これ」

私は奇妙な物体達を指しながら「本当に冗談なのか？」と、胡乱うごんげな眼差しを向けてくる博士に尋ねた。

「う……、じゃあ私が飲もう」

警戒を解かずに じりじりと近づいてくる博士。きつとそのまま沈黙していたら、棄てられる事に感付いたのだろう。私は内心舌打ちした。

本当なら博士が関わった物なぞ この世から全て、分子レベルまで抹消してしまいたいんだけど……。まあいいか、誰かに飲ませるよりはましだろう。何かあったとしても博士だし。

私が見守る中、博士は躊躇ためらいもなく物体Xを飲み下した。

……今、ほんの少しだけ尊敬のようなものが生まれた 気がする。

「う……うまい!!」

「涙目で言っても説得力ないですから」

力のかぎり叫んだ博士に、冷静に突っ込みを入れてさしあげる。私にも飲ませようと思っても、そうはいかない。

博士は不満げな顔を見せたが、直後

「ぐっ!？」と唸り声をあげ しゃがみ込んだ。

博士と助手。

「ああ、ほら言わんこつちや無い。腹でも壊したんですか？」

どうしようもない腐った人物とはいえ、一応 仮にも、この上なく不本意ではあるが私の上司である。不肖の上司に何かあった場合、面倒を見なければいけないのは、助手である私だ。

義務的に様子をうかがうと、博士は唸りながらも滂沱^{ほうた}たる涙を零していた。そんなに辛いのだろうか。

それより面倒臭いので、さっさと立ち直って欲しい。仕事が山ほど残っているのだから。

しばらく、うーうー言いながら博士は涙を流し続けていたが、急に手を痙攣^{けいれん}させ始めた。

……これは本気で危ないかもしれない。どんなに厄介者であっても博士は、この研究所ではなくてはならない人なのだ。非常に不愉快ではあるけれど。

一緒にいる時に死なれてもしたら、責任を追求されかねない。死んでくれるのは願ってもない事だが、私と関係のないところでやって欲しい。

私は救急車を呼ぼうと電話に手を延ばした。

「おおっ！！！？」

けれど博士が奇声を発し それにつられて目を向けた私は、その異様な光景に つい手を止めてしまった。博士の身体が、指先から徐々に透明になっていつているのだ。

博士と助手。

博士は薬の効果に、歓声の雄叫びおたけを上げている。うるさいので取り敢えず、手にしていた電話の子機を投げ付け沈黙させておいた。

それにしても、本当に完成していたとは。さすが　と馬鹿は紙一重……を地でいく博士なだけはある。

「やったあー！　さすが私！！」

妙に納得している私の耳に、またもや博士の雄叫びが響いた。……やはり、子機では威力が足りなかったか。すぐに復活してしまっただよう。

自画自賛している博士に、そこはかたなく不快感を覚えた私は、目に付いた物をなんとなく手に取ってみる。

「う、卯月君？　その物体をどうするつもりなのかね？！」

博士　　というか、空中に浮かんでいる白衣一式は、声を震わせながら尋ねてきた。

「いえ、別に……」

私の手には、百科事典も斯くかや　というような、分厚い本が握られている。

「ただ何となく、手に取りたくなっただけですよ」

「ひいっ！！」

にこりと笑顔を向けた私に、博士は何故だか悲鳴を返してきた。失礼な。

白衣は私から、ゆっくり距離を取り始める。白衣だけが蠢めいいている様は、なんだかとても気味が悪く、私の不快感を更に煽あおっている気がする。

「と、取り敢えずその手に持った凶器……いや、辞書を下ろしてくれないかね?!」

いつの間にか 私は本を振り上げていたらしい。おや、どうしたんだろう。謎ですね。

「不思議そうな顔をしつつ、迫ってくるのは止めたまえ!!」

白衣はもう涙声である。仕方ない……。私は名残惜し気に本を机に戻した。

あからさまに、ほっと息を付いた白衣。その様子に、何だかまた黒いものが浮かびそうになったが、私は気力で押し止める。

「まだだ、今はまだ駄目だ。」

……そう、頭の奥底で声が聞こえた気がした。

「そ……それで、だな」

白衣は何故かびくつきながら話し始めた。

「この効果を確かめる為に、外に出てきていいかな?なんて……はい、調子に乗りました。すいません」

私の放つ　どす黒い雰囲気気付いたのか、途中で意見をひるがえ翻す白衣。当たり前だ。どんだけ仕事が溜まってると思ってるんですか。

「早く仕事を終わらせてください」

笑顔で頼んだ私に白衣は引きつりまくった返事を返し、自分の席に戻った。

そして、何故か自分の白衣を持ち上げ　∴。

「脱がないでくださいね？」

私の言葉に手を止める。やっぱり脱ぐ気だったか。

「え、いや。卯月君もどこまで透明になっているか気になるだろう？」

「なりません」

そもそも、同じ部屋に裸のおっさんが居るなんて果てしなく嫌だ。例えそれが目に見えないとしても。

「というか、透明になってここから逃げ出そうとしてないですよね？」

「そそそそんな事、考えている訳ないじゃないか！　卯月君!？」

……分かりやすすぎる。どうしようか、このおっさん。

私は取り敢えず、手元にあった珈琲　すでに冷めているのが残念だ　を、白衣の頭らしき所にぶちまけた。

博士と助手。

「ぎゃ！？ 何をするんだね！！」

博士の皮を被った白衣が抗議の声を上げた。白衣は白の文字を使うのが申し訳なくらい、茶色に染まってしまった。

その上には、うっすらと茶色の輪郭が浮きあがってきている。

透明薬―3

「いえ、見えるようにしておこうかと」

白衣に珈琲をかけたのは、なにも悪意があるからでは　いや、七割り……八、九割りはそうかもしれないが、本当の目的はそれではない。色を付けることに意味があるのだ。

今のままでは、博士が白衣を脱いでしまえば　どこに居るともしれなくなる。それで外に抜け出すならともかく、悪戯をされてしまつては目も当てられない。

いい大人が悪戯なんかするか！……と思いたい所だが、博士に限つてそれは当てはまらない。

「だからといって珈琲はないだろう、珈琲は！？」

「どうやら博士は珈琲がお気に召さないらしい……。私はため息を一つつくと、壁ぎわにある棚に向かった。

「う、卯月君？　ななな何をしているのかね！？」

「いえ、だって。博士は珈琲がお嫌いなのでしょう？」

我儘な上司を持つと苦勞するものだ。そう考えながら私は濃硫酸という、珈琲の代わりにすべき物を手にした。

「ひっ！　ととと溶ける、溶けるっ……！」

「大丈夫ですよ。ほら、透明ですから溶けても分かりませんって」

またもや壁の隅まで逃げ込んでしまった白衣を、猫なで声でおびき寄せようとしたが敢えなく失敗。白衣は更に縮こまってしまった。

「そういう問題ではない！ 卯月君は私に殺意でもあるのかね！？」
「今頃 気付いたんですか」

さらり、と答える私に「そんな馬鹿な！？」と驚愕する白衣の聲が聞こえてきた。

そこ、驚くところなんだ。今まで散々な事をされてきた私の中では、物凄く辻褃が合っている展開なのですが。

「わわ私を殺すのか！？」

怯える白衣を見て、私の殺意が二割増した。何故だろう？ もはや、見るだけでも駄目なのか。

もしかしたら、博士が透明なのも関係しているのかもしれない。今なら殺害しても、誰にもばれない………完全犯罪。

「何故そんな、してやったり！ のような笑みを浮かべるのかね！？」

はっ！？ 危ない、危ない。どうやら無意識に笑みを浮かべていたらしい。やはり事を起こすには冷静でいなければ。

「いえ、ちょっと思い出し笑いしてただけですよ」

正確には思い込み笑いだが、さほど違いはないだろう。それより

「あ、博士。そんなに濡れていては風邪をひいてしまいます。お拭きしますからこちらへ」

「……………何を企んでいるのかね？」

気を使った私の言葉に、何故か疑わしげな声色で返す白衣。

「企むだなんてそんな。ただ博士の身が心配なんですよ」

嘘はついていない。ある意味正反対の心配だが。

「そもそも私が濡れているのは君のせいなんだがね？」

「でしたら尚更、私がしなければなりません」

さっきとは逆に、今度は私が身を乗り出す。

「えーと、卯月君？ どう見ても手には拭けるような物がない……………」

「というか、濃硫酸しかないように見えるのだがね？」

「ちゃんとハンカチも持ってますよ」

注文の細かい白衣の望み通りに、ポケットからハンカチを取り出す。それと同時にさり気なく距離を詰める。

「そういう意味ではなく、濃硫酸はなんの必要が？」

「私の心の平穏を保つ為です」

「……………」

壁を背に 少しずつ出口に向かう白衣に、じりじりと近づく私。
何だか妙な緊張感が部屋に漂う。

「さあ博士、ふざけてないで」
「すいませーん。博士います〜?」

一気に間を詰めるべく私が動こうとした時、タイミング悪く研究員が入ってきた。鍵を掛けておけば良かった、と内心 舌打ちするというかノックくらいしてほしい。

「佳奈君〜!!」
「うわきゃあああ!!」

これ幸いと研究員 佳奈に飛び付く白衣。
と、その白衣を殴り飛ばし踏み付け 更にはすり潰そうとしている佳奈。

まあ いきなり白衣が飛び掛かってきたら反撃するよな、普通。
私は段々とボロ雑巾のようになっていく博士を傍観しながら、心の中で合掌した。

そうして今日も、騒がしい一日が過ぎていくのであった
…。

博士と助手。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0681d/>

博士と助手。

2009年3月24日08時59分発行